

日中戦争期における中国共産党の敵軍工作訓練隊： 八路軍に対する日本語教育の開始とその特質

趙 新利

はじめに

1937年から1945年までの日中戦争期において、中国共産党が指導する八路軍と新四軍は日本軍に対するプロパガンダ活動を展開した。プロパガンダ活動は、ビラ、呼びかけ、電話など、さまざまな形態で行われた。戦争初期にはプロパガンダ工作は中国語で行われたものの、徐々に日本語に変わった。日本語プロパガンダの資料づくりには、日本人と日本留学経験のある八路軍幹部が利用された。実際の対日本軍プロパガンダ活動を担ったのは主に八路軍の一般兵士であったので、八路軍では、兵士に対して日本語教育を中心とした敵軍工作訓練が集中的に行われた。

このように対日プロパガンダのために八路軍向けの日本語教育を中心とした敵軍工作訓練が行われたものの、日本語プロパガンダ資料づくりを含めその訓練活動がいつ頃から、どのような組織を通じて、どのように行われたのかは、これまで1次資料を通じて体系的に分析されてはいない。本論文では、延安にある敵軍工作訓練隊の概況と敵軍工作訓練隊の日本語教育、前線で行われた八路軍兵士向けの日本語教育過程における事例を分析し、最初の敵軍工作の準備活動である日本語教育がどのような経緯で始まったのかを明らかにし、日中戦争期における中国共産党の敵軍工作訓練隊の活動とその特質を解明する。

(1) 日本語教育の必要性

1937年9月の平型関の戦い¹が終わった直後、イギリス記者であるバートラム (James Bertram) の取材を受けたときに、八路軍総司令である朱徳は次のように八路軍兵士向けの日本語教育の必要性を指摘している。「われわれの兵士は日本語ができないので、日本軍が投降しない場合、われわれは宣伝を通じて彼らを感化することができなかったのだ。それについてわれわれは非常に不快を感じた。その後、われわれは特に捕虜に対してわれわれの政策説明に力を入れた²。」

1944年から1947年まで延安を訪問していたアメリカ軍事視察団が作成した『延安レポート』の記載は、それと一致している。平型関の戦いのさい、八路軍第115師団長である林彪が第115師団に対し、捕虜を獲得する重要性や方法を指示しようと努めたにもかかわらず、肝心の敵が「兵士諸君、武器を捨てなさい」という中国語のスローガンを理解できなかったため、1兵卒も捕まえられなかった。それは、八路軍向けの日本語教育の必要性を認識させた³。平型関の戦いが終わった直後、115師団が通知を出し、将校から一般兵士まで、みんな日本語スローガンを勉強するように命令した。その後の1937年10月に、野戦敵軍工作部が創立された直後に、師団から連隊までの各部隊に対して、迅速に敵軍工作組織を完備させ、日本語スローガンの教育を行い、日本語のわかる幹部を配属し、敵軍文書の収集を強化するなど規定している通知が出された⁴。

1937年10月6日に八路軍総政治部が出した『八路軍総政治部が日本軍向け政治工作を展開する指示』には、日本語でプロパガンダのできる人材の育成の必要性が強調されている。「宣伝隊は主要な日本語スローガンを書くこと、スローガンの呼びかけ、および簡単な日本語回答ができるように

1 日本語教育の必要性和 敵軍工作訓練隊の創立

すべきである。同時に、敵に接近したときに、日本語スローガンの呼びかけのできる人を育成しなければならない⁵⁾と規定している。

(2) 敵軍工作訓練隊の創立

敵軍工作が重視されることにつれ、1938年11月に、八路軍総政治部が延安で敵軍工作訓練隊を創立した。抗日軍政大学は8つの大隊から日本留学経験のある人を中心とした学生を多く集め、敵軍工作隊は作られた。敵軍工作隊は行政上には抗日軍政大学第5大隊に属し、鄧富連(鄧飛)はその隊長兼政治指導員に就任した⁶⁾。

1931年のとき、中華ソビエト中央革命委員会総政治部⁷⁾の下にすでに敵軍工作部が設立された。その後、「白軍工作部」などに改名されたりしたことがあったが、その主な活動は国民党軍向けの「敵軍工作」だった。日中戦争に入ると、今までの国民党軍向けの「白軍工作」と違い、日本軍向けの「敵軍工作」における一番の壁は言語の違いだった。敵軍工作訓練隊の主な任務は日本語を教育することであり、「日文訓練隊」とも呼ばれた。敵軍工作訓練隊の第1期生であった劉国霖の回想録によると、「党がわれわれに任じた任務は、敵軍工作に必要な手段である日本語をきちんと勉強することだった。延安という環境において、日本語、それから生産労働と政治学習は、当時の3大任務であった。」⁸⁾敵軍工作訓練隊の科目の中、「70%程度は日本語などの専門訓練で、30%程度は政治訓練だった⁹⁾」。ここでは、敵軍工作訓練隊における日本語教育を中心に考察する。

敵軍工作を展開させるために、一番重要なのは人材だと共産党が指摘しているのである。1939年2月15日に出版した『八路軍軍政雑誌』では、敵軍工作訓練隊の意義が強調されている。「日本語がわかる人と敵軍工作参加の願いを持っている青年を集め、敵軍工作訓練隊を組織し、敵軍工作の専門人材を訓練する。敵軍を獲得する工作は、我々全体の戦略においては重要な部分だからである¹⁰⁾」と。さらに、1940年6月5日、総政治部副主任である譚政が『八路軍軍政雑誌』で「敵軍工作の当面の任務」を掲載し、「この工作をうまくやるには、中心となる一環は人力の充実にある。敵軍工作部門を強化し、それぞれの敵軍工作幹部は日本語の素養があり、日本国情を了解し、虚心

に研究でき、困難に満ちた工作に従事すべきだ¹¹⁾と指摘している。

2 敵軍工作訓練隊における日本語教育

(1) 教員と学生の構成と選出条件

敵軍工作訓練隊の主な学生は、抗日軍政大学から選出された若い人である。今までの研究では、敵軍工作隊に入る条件は4つあったとされている。1. 中国共産党黨員または中国共産党黨員になる見込みの者。2. 高校卒以上の学力。3. 年齢は20歳から25歳の間。4. 日本語を勉強する意欲があり、敵軍向けの宣伝工作に従事する熱望を持っている者¹²⁾。訓練隊の教員をつとめていた江右書が執筆した文章「敵軍工作訓練隊日本語教育の経験」は1940年6月に出版された『八路軍軍政雑誌』に掲載されている。それによると、「学生を選別するときに、細かい考察が必要である。つまりそれぞれの学生が以下の条件に符合しなければならない。学歴は中学校卒またはその上。日本語に対して興味を持っている者。頭がよくて、外向的な性格の者。言葉がはっきりしているもの。健康なもの¹³⁾との条件が挙げられている。この2つの記載で挙げられている条件は多少違うところがあるが、どちらも学生の学力、特に語学に対するが学力が強調されている。そこから、敵軍工作訓練隊における日本語教育の重要性がわかるだろう。

同時に、前線の各部隊からも兵士が選出され、敵軍工作訓練隊に入れられた。1940年7月に総政治部が120師団に『総政治部が120師団宛ての敵軍工作についての指示』(給120師団關於敵軍工作的指示信)を出し、「われわれは3カ月後にまた日本語訓練隊を再開するので、迅速に学生を派遣してくることを望んでいる」との指示があった¹⁴⁾。延安における敵軍工作の訓練活動と前線における敵軍工作活動の実践とのつながりを強化しようとした。

訓練隊の学生は合わせて150人がいる。上級クラスと初級クラスに分けて教育が実施された。日本留学経験のある人など日本語レベルの高い学生、合わせて20-40人は上級クラスに入れられた。その他の人は初級クラスに入り、仮名から日

本語を勉強し始めた。同時に、上級クラスの学生の中に、初級クラスの教員を務める人もいる¹⁵。第1期生であった劉国霖の回想録によると、劉国霖が在籍している初級クラスは12組に分け、1組には10人程度の生徒がいた¹⁶。つまり、上級クラスには30人程度の生徒がいて、初級クラスには120人程度がいると推定できる。

『八路軍軍政雑誌』には、学生を選出する条件のほか、教員の条件も記載されている。「第1に、教育工作に忠義を尽くし、相当な教育工作経験を持っているもの。第2に、相当な日本語の教養を持っている同時に、政治の面においても相当な教養を持っているもの。第3に、温和で細心である性格のもの」¹⁷との条件が挙げられている。

敵軍工作訓練隊で教員を務めているのは、日本留学経験のある中国人のほか、教育で転向した日本人捕虜もいた。『八路軍軍政雑誌』では、転向した日本人捕虜への利用も記載されている。「すでに覚醒した日本人捕虜を利用し、日本語教育を協力させることは、学生だけではなく、教員にとっても大変有意義なこととなる。なぜなら、彼らは学生に正確な発音を教えることができる同時に、日本の風習や日本軍隊の正確な状況を紹介できる。そのほか、中国人教員が解決できない問題（たとえば日本の方言など）も対応できるからである¹⁸」と日本人を利用する狙いが記載されている。

1941年10月2日付の『解放日報』の記事「日本人森健が辺区参議院議員候補者に」によると、「森君は日本九州人、27歳、鉄道労働者出身、1938年に八路軍に入隊、同年延安に来る。敵軍工作訓練隊日本語教員を担任」¹⁹という記載があり、森健が延安の敵軍工作訓練隊での教員経験は明らかになっている。徐則浩の考察によると、「日本語教員は、最初は朝鮮人徐輝と2人の日本人捕虜である吉積清（のち高山進に改名）と原田好夫だった。その後、前線から主任教員江右書を延安に送ってきた。江氏は日本で長年の留学経験があり、日本語の教養は高い。その教学方法も良く、学生に高く評価されていた²⁰。」

上述した徐則浩の考察には、「吉積清（のち高山進に改名）」とあるが、複数の資料で確認したところ、吉積清と高山進は同じ人ではない²¹。吉積清と森健は同一の人物であることは複数の記載

から確認できた²²。たとえば、1942年8月20日から29日まで、延安工学校で開催された華北日本人民反戦団体代表大会で、在華日本人民反戦同盟華北連合会の会長は杉本一夫に選ばれ、森健、松井英男は副会長に、高山進、茂田江純、滝沢三郎、梅田照文は執行委員に選ばれたと『解放日報』が記載している²³。ここから、森健と高山進は同じ人ではないことが確定できる。徐則浩の研究で「吉積清がのち高山進に改名した」ことは正確ではないと判断できる。高山進は、春田好夫ともいう、本名は川田好長という²⁴。

敵軍工作訓練隊の第1期生であった劉国霖の回想録によると、訓練隊に入ったら、日本語レベルが確認された後、初級クラスに入れられた。日本留学経験のある人や、日本語レベルの高い人が上級クラスに入れられ、他の人は初級クラスに入れられ、「アイウエオ」から勉強した。最初の時、教員は朝鮮人の徐輝であった。その後、日本人捕虜であった吉積清が教員を担当した。1939年3月に、日本人捕虜の春田好夫が120師団から延安に送られて、日本語を教えてくれた。春田は吉積より若くて、発音も吉積と違い、標準そうに聞こえた。春節の後、また前線から主任教員である江右書が送られてきた²⁵。

つまり、敵軍工作訓練隊は比較的厳しい基準に基づいて学生と教員を選出して創立されたのである。語学に対する学力の強い学生が150名選出され、日本語のできる朝鮮人、日本人、日本留学の経験ある中国人がその教員に選出された。

(2) 延安敵軍工作訓練隊における日本語教育の概況

訓練隊における日本語教育は3つの学期に分けて実施された。第1学期は入門知識を教育する期間である。主な学習内容は、発音、日本語の仮名の書き方、単語、短い文などがある。この学期は1カ月間くらいで済むのである。「学生が短い文を勉強するときに、さまざまな疑問（たとえばなぜ動詞にはいくつかの形があるのか。『行かない、行きます、行く、行く人、行けば』など）が生じるとき、第2学期に入る。」その次の第2学期は基礎知識を教育する段階である。学習する主な内容は文法、短い文、日常会話、文を作ることなどである。この学期は5カ月程度である。第3学期は

ある程度深い内容の教育である。教育する主な内容は長い文章、文学作品、理論書籍の読解、敵軍文書の翻訳、敵軍兵士の手紙・新聞の翻訳、短い作文、日本語でのスピーチや討論会などの形がある。この学期は4カ月か5カ月程度がかかる²⁶。

第1期の訓練隊には、150名の学生が集まり、日本語教育が実施された。生活日本語化、日本語弁論大会、日本語歌などの手段を通じて日本語教育が展開された。第1期訓練班でこれらの日本語教育を受けた150名の内、65人(43.3%)が「理論的文章、敵軍文書及び新聞を翻訳することができ、誤りが少ない」レベルとなった。63人(43%)が敵軍の一般的文書を翻訳することができ、誤りが比較的多い」レベルとなった。22人(14.7%)が「簡単な文章しか翻訳できない」レベルに達した。会話の面に於いても、31人(20.7%)が「普通の言葉を使い、簡単な理論的会話ができ、捕虜教育ができる」レベルとなった。57人(38%)が「日常会話と捕虜訊問のできる」レベルとなった。「簡単な会話しかできない」人は52人(34.7%)だった。「しゃべるのが困難だと感じる」人は10人(6.6%)だった。さらに作文の面から見ると、「極少数の人が短い作文がかける以外、ほとんどはかけない」と『八路軍軍政雑誌』が記載している²⁷。

会話教育の担当教員に対して、「丁寧語」の重要性が強調されている。「学生に完全な文と丁寧語を使う習慣を身につけさせるべきである。学生が半分の文や命令形の文を簡単に言ってしまう傾向がある。そういう言い方に慣れてしまうと、簡単に直れない。将来の工作の中、そういった口調で新来捕虜にしゃべると、反感を及ぼすに違いない²⁸。」

前述したとおり、徐則浩の考察によると、敵軍工作訓練隊は1938年11月に創立された。劉国霖の回想によると、第1期の敵軍工作訓練隊は1938年12月に正式開校し、学生は1940年4月に卒業した²⁹。つまり、150名の学生が、1939年末から1940年4月にかけて、1年4カ月間の教育を受けていた。

(3) 「日常生活の日本語化」の教育手段

『八路軍軍政雑誌』の記載によると、日本語教育を実施するときに、「日常生活の日本語化」は

重要な手段となった。敵軍工作訓練隊の教員である江右書が論文で「日常生活の日本語化」の実施を記載している。「外国語を勉強するとき、環境は非常に重要である。たとえば日本へ行って日本語を勉強するのが国内で勉強するよりずいぶん速い。われわれも日常生活の日本語化という手段であのような環境を作り上げる。つまり、教員職員と学生全体を動員し、特別な事故の時を除いて、起床、集まり、会議などの号令から一般会話まで、一律日本語を使うのである。しかし、実行するときに、以下の注意事項に気を使うべきである。1、日常生活の日本語化の提唱は、早すぎたはいけない。学生が簡単な日常会話ができるときに実施したほうがいい。2、実施するときには、ある程度の強制が必要である。3、各方面の動員工作が必要である。4、日常生活日本語化の実施で、一部の学生が1日中口を開かない現象を防ぐべきである³⁰。」

「日常生活の日本語化」の教育手段は、捕虜となった小林清の回想録『在中国的土地上』でも確認できた。「抗日軍政大学で日本語訓練隊が作られ、日本工農学校の生徒から、学識の高い2名を選出し訓練隊の講師を務めさせた。この2人の同志は厳しく日本語教育を行った。中国同志が早く日本語を身につけるため、勉強になる授業を行うほか、『日常生活も日本語化』と提案した。彼らも出来るだけ中国同志たちと一緒にいるようにし、中国人同志の日本語勉強をサポートしていた。それは極めて大きな効果が収められ、全く日本語が分からない中国同志たちが、1年間余りの期間で基礎的な日本語を習得できた。これらの同志は建校5周年記念パーティーで、彼ら自身が編成した現代劇を日本語で披露し、高い評価を得た³¹。」

「日常生活の日本語化」との教育手段は敵軍工作訓練隊の第1期生であった劉国霖の回想録でも確認できた。それによると、基礎的文法の教育が終わった後、訓練隊には何回かの「日常生活の日本語化」週間活動が行われた。一定の時間内においては、すべての生徒の間の中国会話が禁止され、何を言おうとしても日本語で言わなければいけない。言えないことがあったら、日本人の吉積清または春田好夫に聞く、という仕組みだった。「私は時間があるときに必ず彼らのところに行っ

て日本語会話の練習をしていた」という³²。

そのほかに日本語スピーチ会また討論会の実施、日本語歌の練習、日本語壁新聞の制作、日本語反戦劇の演出などの形で、日本語教育と敵軍工作教育を結びつけた。

(4) 政治教育

敵軍工作訓練隊では、日本語教育は主だったが、政治訓練も行われた。政治訓練は政治報告と政治教学に分けている。学生を集め、中国共産党中央指導者の演説を聞かせることはよくあった。その内容は抗日戦争の情勢、民族統一戦線の方針と政策など幅広くあった。そのほか、関連学者を招いて、マルクスレーニン主義理論の講義も行ってた。たとえば和培元は哲学の講義を担当し、呉允は中国現代革命史とソ連共産党史の講義を担当し、京都帝国大学経済学部及び大学院で留学した経験のある王学文は政治経済学を担当した。同時に、総政治部敵軍工作部の劉型を招いて、敵軍向けのプロパガンダ工作と敵軍工作の規律などの講義を行った。政治訓練においては、『持久戦論』、『新段階論』、『矛盾論』、『実践論』、『ソ連共産党史』、『レーニン主義問題論』、『政治経済学』、『通俗哲学講話』などの書籍は必修となっていた³³。

前述した通り、「日文訓練隊」とも呼ばれる敵



陝西省档案馆で発見した八路軍政治部編の『抗日戦士政治課本』³⁵

軍工作訓練隊のほとんどは初級クラスの生徒だった。日本語教育は訓練隊の中心であり、政治教育は重点的に行ってはいなかった。敵軍工作訓練隊の第1期生であった劉国霖の回想録によると、敵軍工作訓練隊から卒業したら、劉国霖と他の10数名の同志が「八路軍軍政学院」に入れられた。「党の意図は明確的であり、われわれは日本語ができることだけではなく、政治レベル、理論レベルも一層高めなければならないのだ³⁴。」

敵軍工作隊は、日本語教育と政治教育を重ねて、前線における敵軍工作、日本兵捕虜の教育などのために、多くの敵軍工作幹部の人材的準備となった。

3 八路軍兵士向けの日本語教育

中国共産党は一貫としてプロパガンダ工作を重視している。長征前後の「紅軍」時代には、毛沢東は「中国の紅軍は戦闘隊である同時に、工作隊、生産隊でもある」との論調を強調していた³⁶。つまり、紅軍兵士はみんな戦闘員である同時に、宣伝工作員でもある。戦闘に勇敢であるだけでは足りなく、群衆に宣伝する工作も上手でなければならないとの考えだった。1936年6月から10月にかけて、初めて毛沢東取材したアメリカ記者であるスノウは、著作『中国の赤い星(Red Star Over China)』で、中国共産党の統一戦線政策を考察するときに、「紅軍は今すでに政治宣伝隊に変身しつつある」³⁷と指摘している。日本軍向けの敵軍工作になると、それと似たような考えもあったのではないかと考えられる。つまり、一部の敵軍工作員だけではなく、八路軍兵士全体に敵軍工作の教育を実施し、敵軍工作を協力してもらう考えである。八路軍の敵軍工作員のほか、日本語教育は八路軍兵士全員に向けて、普及させようとした。

敵軍工作訓練隊の第1期生であった劉国霖の回想録によると、1941年5月に、「前線にも更なる多くの敵軍工作幹部を育成するために、日本語訓練隊を開くこととなった。そのため、私は前線の野戦政治部に派遣され、日本語教育工作に従事し始めた³⁸。」1940年冬のときに新四軍第4師団の敵

軍工作部長を勤めた劉貫一の回想によると、延安で育てられた敵軍工作幹部は各前線に派遣され、活躍していた。当時の新四軍第4師団の敵軍工作部だけでは、延安敵軍工作訓練班から卒業して派遣されて来た人は6人もいた。それぞれは張文華、劉滔、趙彤、呂風翔、呉振中、史華だった。彼らはみんな敵軍工作の中核となったという³⁹。



陝西省档案馆で発見した八路軍政治部編の『抗戦日語讀本』⁴⁰

(1) 日本語幹事による日本語教育

前述した通り、延安にある敵軍工作訓練隊で育てられた敵軍工作幹部は前線に送られて、各部隊の敵軍工作や八路軍兵士向けの日本語教育に従事させた。1940年7月25日に出版された『八路軍軍政雑誌』には、八路軍総政治部が出した『総政治部が120師団宛ての敵軍工作についての指示』（給120師団於敵軍工作的指示信）が掲載された。この「指示」によると、「われわれはすでに、敵軍工作訓練隊の卒業生の一部をあなたたちのところに送った。幹部の教育訓練に関しては、われわれはまさに工作大綱、工作便覧及び日本語教材を作っているところで、期間を切って完成する⁴¹。」前線に送られた敵軍訓練隊の卒業生は、各部隊に行き日本軍向けの敵軍工作や八路軍向けの日本語教育に従事したことがわかる。

日本語訓練隊は、各地の八路軍師団のために敵軍工作員を育てようとしていた。前述した通り、1940年7月総政治部が120師団宛ての敵軍工作についての指示を出し、日文訓練隊が再開されるた

め、学生の迅速派遣を要請した。八路軍、新四軍の各師団から旅団まで、それぞれ短期日本語訓練班を開き、日本語の呼びかけ訓練を行った。

延安にある敵軍訓練隊第1期から150名が卒業した。延安だけではなく、前線にある各部隊においても、敵軍工作訓練班が作られたことは次の記載でわかる。1941年3月に出版された『敵我在宣伝戦線上』は、そのときまでの中国共産党の軍隊の対敵・偽軍プロパガンダ工作を系統的に記載している。それによると、前線部隊において、最初に敵軍工作訓練班を作ったのは129師団の政治部であった。その後、115師団、120師団、野戦政治部および冀察晋軍区はそれぞれ訓練班を作った。延安の敵軍工作訓練隊が作られた以前には、もうすでに各前線部隊において敵軍工作の訓練工作が開始された。1938年末まで、全軍において20以上の敵軍工作訓練班を行い、600人以上の敵軍幹部を訓練したという⁴²。

訓練班の主な科目は日本語、敵軍工作、部隊政治工作、軍事常識などがあり、その中日本語が一番中心となっている⁴³。「一般戦士は3、4句のスローガンができ、中隊敵軍工作組は7、8句ができるようになり、いくつかの日本語歌曲も歌えるようになった。主力部隊の状況はそれを上回っている⁴⁴。」敵軍工作訓練隊は継続的に、しかも前線の部隊と連動させながら実行させた。

『敵我在宣伝戦線上』では、八路軍兵士向けの具体的な日本語教育過程を記載している。1937年9月の平型関の戦い以後、八路軍では、日本語スローガンの教育が始まった。1937年10月の広陽戦闘では、「幹部の日本語スローガンの呼びかけで、意外に何名かの日本兵が投降してきた。この事実で、日本語スローガンを勉強するブームが巻き起こった⁴⁵。」

『敵我在宣伝戦線上』の記載によると、115師団がとった教育手段は、各中隊の文化教員を召集し、日本語スローガンを教え、これらの文化教員は、各中隊に戻り、兵士に教える形であった。

120師団は違う手段をとっていた。120師団では、各分隊からまず1人を選出し大隊また中隊に送り込んで日本語スローガンを勉強させる。1、2句を身につけたらすぐ各分隊に戻らせ、兵士みんなに教える。その次のとき、前回と違う人を大隊や中隊に送り日本語スローガンを勉強させる。

徐々に兵士のみんなは何句ものスローガンを身につけられた。

捕虜を利用して日本語スローガンと日本語歌を八路軍兵士に教える部隊もある。そのほか、行軍の休憩時間や、駐屯するとき朝晩の点呼のときを利用し、敵軍工作組の人または教員が日本語スローガンの復習を指導する形も普遍的に使われていた手段である。また、遊戯のときに全員一緒に大きな声で叫んだり、あるいは2つの組に分けて相手を日本軍だと想像して呼びかける形で日本語スローガンを練習する部隊もある⁴⁶。

これらの工夫で、一般兵士は普遍的に3句の日本語スローガンを発音し呼びかけることができるようになった。中隊の工作組になると、7、8句の日本語スローガンと3曲の日本語歌を身につけることができた。

『敵我在宣伝戦線上』によると、部隊の中の日本語教育制度というところ、115師団6連隊が一番うまく行われたとされている。その制度は次のように記載されている。

115師団6連隊の日本語教育制度：

- (A) 一般兵士に対する教育。毎週土曜日の文化科目の時間を利用し、文化教員が日本語スローガンを教えると規定している。
- (B) 工作組に対する教育。毎週大隊本部に来てもらい、3回の授業を受ける。その中の2回は日本語の授業で、1回は敵軍工作の授業である。実習幹部が教える。
- (C) 中隊の文化教員と副指導員に対する教育。毎週大隊本部に2回来て授業を受ける。教材は『日語速成教材』である。実習幹事が教える。
- (D) 中隊幹部に対する教育。毎週大隊本部に1回来て日本語の授業を受ける。実習幹事が教える。
- (E) 大隊本部の実習幹事に対する教育。毎週1回連隊に行って日本語授業を受ける。教材は『捕虜を勝ち取る会話』（争取捕虜対話）である。連隊の敵軍工作股の日本語幹事が教える。
- (F) 連隊政治処にある各股の幹事に対する教育。毎朝敵軍工作股に行って日本語授業を受ける。敵軍工作股の日本語幹事が教える⁴⁷。

この資料から見ると、日本語幹事→大隊本部の実習幹事→中隊幹部（文化教員また副指導員）→工作組→一般兵士という流れで八路軍全体の日本語教育が展開された。

129師団の日本語教育は、上記の115師団と一致している。八路軍129師団政治部敵軍工作科長をつとめていた盧耀武と劉国霖の回想によると、中国語で日本兵向けの呼びかけ工作の失敗事件から、129師団は、一般兵士向けの呼びかけ訓練を実施した。呼びかけるスローガンは、「武器を差し出したら殺さない」「捕虜を優待する」「日本軍閥を打倒しよう」などがあつた。具体的な教育工作は次の通りである。

まず各中隊から3-5名の兵士を選出し、連隊の政治処で1週間くらいの集中訓練を受けさせる。この3-5名を選出する基準は、ある程度の教育を受けたこと、頭がいいこと、発音がはっきりしていることであつた。連隊政治処の集中訓練の内容は、敵軍を瓦解する意義、政策と工作を展開する方法のほかに、日本語の呼びかけもあつた。訓練を受けた兵士は中隊に戻り、敵軍工作組を作る。中隊の兵士全員が日本語の呼びかけを習得できるように教育を実施する。それから、敵軍工作幹部は直接各中隊に行って視察し、現地で日本語の補修を行う。このような日本語での呼びかけ訓練は、日中戦争が終わるまで続いた。「半世紀がたった今日でも、当時の兵士や幹部らは、まだ当時練習していた日本語の呼びかけがうまくできる⁴⁸。」

では、連隊政治処の敵軍工作股の日本語幹事はどこから日本語を習うのか。『敵我在宣伝戦線上』の記載によると、総政治部が6中全会開催後、敵軍訓練隊を創立し、150名の敵軍工作幹部が育成された。これらの幹部は敵軍の資料の翻訳や捕虜の訊問のできる幹部であり、その中の一部は宣伝品を作るために捕虜を訓練することもできる。これらの150名の幹部の中、半数は前線に送り、工作させている⁴⁹。

徐則浩の『従捕虜到戦友』によると、1940年5月、総政治部敵軍工作訓練隊で1年以上の時間勉強を経て卒業した150人の中、50人程度が延安の軍委2局、軍政学院、総政治部敵軍工作部などに残して工作し始めた。ほかの100人程度は華中、華北の前方部隊に送られた⁵⁰。この2つの資料の

記載は多少違うところがあるが、敵軍工作訓練隊の教育を受けた人が多く前線に送られ、敵軍工作に従事させたことはわかるだろう。これらの記載から見ると、延安にある総政治部の敵軍訓練隊が育成した敵軍工作幹部の半数また半数以上は前線に送られた。これらの幹部は、各部隊の日本語幹事向けの日本語教育と敵軍工作の訓練に従事したと考えられる。

敵軍工作訓練隊の第1期生であった劉国霖は延安から前線の野戦政治部が駐在している山西省の麻田村に派遣され、前線における八路軍の一般兵士向けの日本語教育に従事した。劉国霖はいつも覚醒連盟の同志と一緒に主力部隊である129師団385旅団に行って日本語スローガンの教育を実施していた。「日本の兵隊さん！捕虜を殺さない。優待する。武器を棄てろ！生まれ！手を挙げよ！」などのスローガンを、中隊と小隊の幹部及び一部の一般兵士が身につけるようになった⁵¹。

1941年6月30日付の『解放日報』には、晋察冀地区における八路軍向けの日本語教育が記載されている。それによると、八路軍の中では、よく八路軍兵士が歌う日本語歌が聞こえる。しかし、3カ月前まで、彼らはまだ何も分からない農民だった。八路軍で彼らは日本語の仮名だけでなく、日本語の呼びかけ用語と日本語歌もできるようになったという⁵²。

(2) 日本人による日本語教育

前線における八路軍の日本語教育においても、日本人の協力を得て実行させた部分が多くある。共産党の敵軍工作に協力した日本人が原清子は1937年末、山西省晋城にあった華北幹部訓練班に日本語教師として赴任し、2カ月間日本語を教えていた。華北幹部訓練班のちに華北軍政幹部学校に改称された。訓練班に卒業生は八路軍などに配属させた⁵³。1938年3月のとき、原清子は八路軍の地方部隊である晋豫辺遊撃隊の敵軍工作科長を務めたことがある。原清子の回想によると、前線で日本兵に呼びかけるための簡単な日本語会話を、友軍兵士たちに教えるのが主な仕事であった。たとえば、司令官の唐天際が「捕虜優待」「打倒日本帝国主義」などのスローガンを書き示し、日本語で清子が発音し、それを聞いて日本語の音に近い中国語をあててルビをふったメモを作

らせ、前線に携帯させたのである。日本軍への呼びかけ工作は、捕虜が増えてくると元日本兵が行なうようになったのだが、戦争が始まったばかりの頃は中国兵がつかない日本語で呼びかけていた⁵⁴。長年にわたって総政治部敵軍工作部部长を務めた王学文が自身の日本留学生活（1910～1927）についての回想によると、日本に来たばかりの中国人留学生は「タマゴ」という単語を知らなかったが、人に「タマゴ」と教えられた。日本語の「タマゴ」は中国語の「他罵我」（タマウオ）の発音に近いので、彼は得意になって「他罵我」（彼は私を罵る）という覚えやすい中国語でタマゴという日本語に置きかえそうとした⁵⁵。全く日本語の基礎のない中国兵士向けの日本語教育を考察するさい、敵軍工作部で活躍していた人々の日本留学経験は参考になるであろう。

日本人捕虜を通じての日本語教育も多くの資料で確認できる。捕虜となった日本人兵士の水野靖夫の回想録『日本軍と戦った日本兵』では、中国兵士に日本語を教える回想が記載されている。「正月も半ばすぎたころ、突然、兵隊に日本語を教えてくださいという話が私たちのところにまいこんできた。」「翌日、私たちははじめて白さんと日本語教育の具体計画について論じあった。期間は1カ月とのことであった。目的は、日本軍と日本の居留民に対する呼びかけが中心であることであった。私はそれが単純にのみこめなかった。本気であなたたちは日本軍に呼びかける気なのかと念を押すと、白さんはキッパリと『それ以外に目的はない』といいきった。」「水野は結局「納得することはできなかった。しかし、やむをえなかった。私たちはいくつかの言葉をえらんで、2～30種のスローガンをつくりあげた。50音の一覧表と合わせて、5、6頁の冊子ができた。早速、翌日から小学校の教室をかりて授業をはじめることになった⁵⁶。」「同氏はその後、抗日軍政大学第4分校に配置され、八路軍向けの日本語教育に従事していた。「軍政大学の学生たちは、ほとんど20代の青年たちばかりで、いずれも全国各地から志願して来た者ばかりであった。彼らはここで1年半の期間、それぞれ軍事と行政の専門を学んで、新たな任務を持って、また各地に散っていった。」「私はここで、片仮名、平仮名の50音と、簡単な日常会話、前線での呼びかけ、壁にかくスローガ

ンなどを教えた。日本人の生活習慣，暮らしぶりなどについても知るかぎりのことを教えた。農民兵の場合とはちがって，さすがによりすぐりの学生ばかりであった。彼らは，私の教えを，砂が水を吸うように吸収していった。私の授業は，毎週1回3時間で，終業期間は一応3カ月であった。ここで私が教えた500人の青年男女が，その後どのようになったか，私は知らない。しかし，おそらく戦中戦後にかけ，中国革命の成功に大きな役割を果たしていったのではないかと信じている⁵⁷。」

延安の敵軍工作訓練隊および前線の115師団，120師団，129師団で行われた日本語教育を考察した。延安で集中して日本語教育を受けた作業員たちは，どういう流れで習得した日本語を前線の兵士まで教え込んだのかは明らかになっている。その流れは次のようにまとめられる（下図）。

終わりに

1937年に日中戦争が始まるまで，プロパガンダ工作を重視する中国共産党は国民党軍に向けて，呼びかけ，ビラなどのプロパガンダ工作を行っていた。日中戦争に入ると，そのときまでのやり方で行われた日本軍向けのプロパガンダ工作は，必ずしも成功しなかった。そこで，中国共産党は言語も文化も違う日本軍兵士に対して，日本語によるプロパガンダを行わないと，効果が得られないと認識した。敵軍工作訓練隊と各前線部隊における八路軍兵士向けの日本語教育には，そういった背景があった。

本稿では，1938年11月に創立され，12月に開

講された第1期の敵軍工作訓練隊を中心に，各部隊における八路軍兵士向けの日本語教育を考察した。前述した分析から，日本語教育の特質は次の3点にまとめられる。

第1は，日本語教育の目的である。敵軍工作の目的は，日本軍を瓦解させることである。1937年12月25日，毛沢東は『イギリス記者パートラムとの談話』で，政治工作の「3大原則」を始めて公表し，官兵一致の原則，軍民一致の原則，敵軍瓦解と捕虜優待原則を「政治工作3大原則」としてまとめた⁵⁸。日本語教育の目的は，まさに日本人捕虜を獲得し，日本軍兵士の厭戦気分を増長させることであった。陝西省档案馆で発見した『抗戦日語読本』の内容のほとんどは，捕虜を獲得するための日本語だった。敵軍工作隊での日本語訓練と政治訓練は，その後の日本軍向けのプロパガンダ工作においては欠かせない準備工作となり，各部隊において，多くの敵軍工作幹部が養成された。八路軍の一般兵士向けの日本語教育と敵軍工作訓練は，プロパガンダを通じて日本軍を瓦解させるという中国共産党の敵軍工作思想を一般兵士に浸透させる一環となった。

第2は，日本語教育の系統性である。日中戦争期における中国共産党の敵軍工作訓練は，延安および前線各地で系統的，組織的に行われた。第1期の敵軍工作訓練隊は1938年12月から1940年4月まで延安で正式に行われた。訓練内容の7割は日本語教育で，3割は政治訓練だった。卒業した150人の中，10数人は八路軍軍政学院に入れられ，一層高い政治訓練を受けさせた。150人の半数以上は，前線に送られ，各部隊の敵軍工作訓練，特に日本語訓練を行っていた。前線各部隊において，延安の敵軍工作訓練隊で訓練を受けた敵軍工作幹部が各部隊に送り込まれ，連隊の軍工作組織

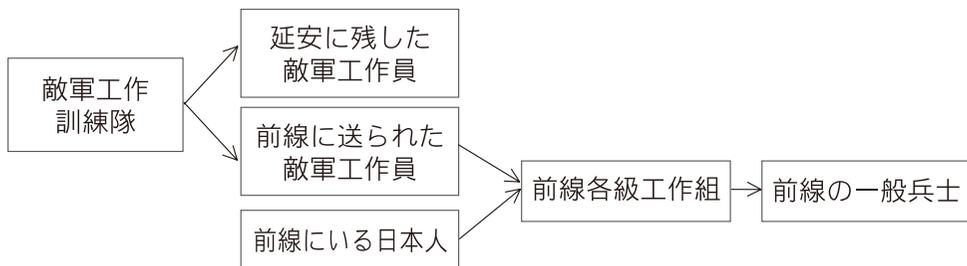


図 八路軍に対する日本語教育の流れ

の日本語幹事を養成し、それから大隊実習幹事→中隊幹部→一般兵士の順に日本語教育が浸透していったのである。同時に、前線の抗日軍政大学分校などにおいても、日本人捕虜などを利用し、将校や一般兵士向けの日本語教育が展開された。

第3は、日本語教育の効果が重視されたことである。当時の中国共産党は、また物質的にも人材的にも欠乏していたが、八路軍向けの日本語教育はある程度の科学性を持って行われた。延安や前線で行われた日本語教育の教員と学生は厳しい基準に基づき選出された。抗日軍政大学などから選出された150名の学生の中、120名程度は初級クラスで基礎から日本語を勉強し始め、30名程度は上級クラスで高等の日本語教育を受けた。訓練隊の教員は、朝鮮人の徐輝、日本人の森健（吉積清）と高山進（春田好夫）、中国人の江右書などがいた。上級クラスの学生は、初級クラスの学生に日本語を教えたこともあった。日本語講義、「生活日本語化」などの形を通じて、4割以上の人が「理論的文章、敵軍文書および新聞を翻訳できる」という高いレベルになった。

これらの工夫で、八路軍の一般兵士は、3句程度の日本語スローガンを発音し呼びかけることができ、中隊の工作員は7、8句の日本語スローガンと3曲の日本語歌ができるようになった。これらの工作は、その後の八路軍の敵軍工作に対してきわめて大きな影響を及ぼした。八路軍兵士向けの日本語教育が実施されてはじめて、八路軍兵士を通じての対日本軍プロパガンダ工作は可能となったのである。

本論文は、1939年に延安で創立された第1期の敵軍工作訓練隊を中心に考察し、中国共産党が日本軍に対するプロパガンダ工作の道具である日本語の教育実体を考察した。敵軍工作訓練隊は1940年に廃止され、総政治部敵軍工作訓練部の直轄下に新たに再建された「敵軍工作幹部学校」に変身した。⁵⁹ 今後は引き続き、プロパガンダの具体的な内容、プロパガンダ手段、日本人の協力の獲得などに注目していく。

[注]

1 八路軍第115師は山西省平型関で、旧日本軍第5師団第

- 21 旅団の一部部隊との激戦を繰り広げた戦闘。
- 2 パートラム (James Bertram) 著、林淡秋等訳『華北前線』新華出版社、1986年7月、168頁。
- 3 山本武利編訳『延安リポート—アメリカ戦時情報局の対日軍事工作』岩波書店、2006年2月、641頁。
- 4 『敵我在宣伝戦線上』陝西省檔案館、3018-11-3-23、211頁。
- 5 「八路軍政治部關於開展日軍政治工作的指示」中国人民解放軍歴史資料従書編審委員会『八路軍文獻』解放軍出版社、1994年5月、61-62頁。
- 6 徐則浩『從捕虜到戰友』安徽人民出版社2005年7月、36頁。
- 7 中共中央軍事委員会総政治部は1930年に作られ、1931年に中華ソビエト中央革命軍事委員会に改名された。さらに1937年8月から中共中央軍事委員会総政治部に改名され、対外には「八路軍総政治部」との名義が使われた。
- 8 劉国霖、鈴木伝三郎『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』学苑出版社、2000年6月、21頁。
- 9 前掲書『從捕虜到戰友』37頁。
- 10 許光達「抗大最近的動向」『八路軍軍政雜誌』1939年2月15日、第2期、102頁。
- 11 『八路軍軍政雜誌』第2卷、第6期。
- 12 前掲書『從捕虜到戰友』36頁。
- 13 江右書「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」、十八集團軍政治部出版：『八路軍軍政雜誌』第2卷、第6期、1940年6月、73頁。
- 14 「給120師関与敵軍工作的指示信」『八路軍軍政雜誌』第2卷、1940年7月25日、第7期、115頁。
- 15 前掲書『從捕虜到戰友』37頁。
- 16 前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』18頁。
- 17 前掲「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」73頁。
- 18 前掲「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」73頁。
- 19 「日人森健、当选辺区参議員候選人」『解放日報』1941年10月2日、4面。
- 20 前掲書『從捕虜到戰友』37頁。
- 21 たとえば、「反戦兵士物語：在華日本人反戦同盟員の記録」（反戦同盟記録編集委員会編、日本共産党中央委員会出版部、1963年9月）には森健と高山進両方の回想録がある。1940年7月7日に結成された反戦同盟延安支部のメンバーには、森健、高山進などの名前がいた（王庭岳『在華日人反戦運動史略』河南人民出版社、1989年、77頁）。
- 22 前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』187頁。香川孝志、前田光繁著、趙安博、吳從勇訳『八路軍内日本兵』解放軍出版社、1985年7月、75頁。
- 23 「華北士兵代表大会反戦団体大会昨日勝利閉幕、最後通過綱領及会章、成立反戦同盟統一機構」『解放日報』1942年8月30日1面。
- 24 姫田光義、藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店、1999年9月18日、153頁。水谷尚子『「反日」以前：中国対日工作者たちの回想』文芸

- 春秋, 2006年7月30日, 47頁。
- 25 前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』17-18頁。
- 26 前掲「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」74頁。
- 27 前掲「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」74頁。
- 28 前掲「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」76-77頁。
- 29 前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』18-23頁。
- 30 前掲「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」78頁。
- 31 小林清『一個「日本八路」的自述 在中国的土地上』解放軍出版社, 1985年8月, 105頁。
- 32 前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』22頁。
- 33 前掲書『從捕虜到戰友』38頁。
- 34 前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』24頁。
- 35 陝西省檔案館, 2028-8-11-53
- 36 毛沢東「關於糾正党内的錯誤思想」(1929年12月)『毛沢東選集』第2版第1卷, 86頁。
- 37 埃德加・斯诺 著, 董乐山 訳『西行漫記』三聯書店出版, 1979年12月, 304頁。
- 38 前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』26頁。
- 39 劉貫一「敵軍工作談片」『新四軍回憶資料』(第1卷), 解放軍出版社, 1990年, 79頁。
- 40 陝西省檔案館, 2291-8-14-105
- 41 前掲「給120師関与敵軍工作的指示信」115頁。
- 42 前掲書『敵我在宣伝戦線上』211頁。
- 43 前掲書『敵我在宣伝戦線上』212頁。
- 44 姜思毅『中国共産党軍隊政治工作七十年史』第2卷, 解放軍出版社, 1991年, 239頁。
- 45 前掲書『敵我在宣伝戦線上』214頁。
- 46 前掲書『敵我在宣伝戦線上』214頁。
- 47 前掲書『敵我在宣伝戦線上』215頁。
- 48 盧耀武, 劉国霖「129師的敵軍工作」『八路軍回憶史料3』解放軍出版社, 1991年9月, 93-94頁。
- 49 前掲書『敵我在宣伝戦線上』222頁。
- 50 前掲書『從捕虜到戰友』35頁。
- 51 前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』56頁。
- 52 「敵軍工作在晋察冀」『解放日報』1941年6月30日2面。
- 53 前掲書『「反日」以前: 中国対日工作者たちの回想』28-29頁。
- 54 前掲書『「反日」以前: 中国対日工作者たちの回想』30頁。
- 55 水学文「河上肇先生に師事して」人民中国雜誌社編『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』東方書店, 1982年9月29日, 26頁。
- 56 水野靖夫『日本軍と戦った日本兵: 一反戦兵士の手記』白石書店, 1974年8月31日, 92-93頁。
- 57 前掲『日本軍と戦った日本兵: 一反戦兵士の手記』, 100-104頁。
- 58 郭化若『中国人民解放军軍史大辞典』吉林人民出版社, 1993年, 1276頁。
- 59 前掲書『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』247頁。

趙 新利 (ちょう しんり, 1982年生)

所 属 早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程

最終学歴 中国・西安交通大学人文社会科学院修士課程

所属学会 日中コミュニケーション研究会, 早稲田政治学会

研究分野 政治宣伝

主要著作 「日本メディアの議題設定分析: 日本新聞界の『反国家分裂法』報道を例にして」『新聞大学』85号 (2005年秋), 28-42頁

